



みやぎの明治村 とよま資料館だより

登米市歴史資料館・高倉勝子美術館
発行/㈱とよま振興公社
〒987-0702
宮城県登米市登米町寺池桜小路2
Tel: 0220-52-5566
Fax: 0220-52-2630
<http://toyoma.co.jp>
発行日:令和8年2月17日



だてなりくん

登米町伝統芸能伝承館編(森舞台) 第19号

とよま資料館だより第19号をお読みの皆様、あけましておめでとうございます。今回の資料館だよりは2月17日発行といたしました。この日は旧暦の元旦になります。新春のお慶びを申し上げますとともに、今年もどうぞよろしくお願ひいたします。

開館から30年

さて、今年は平成で言いますと平成38年になります。弊社が登米市から指定管理を受託しております「伝統芸能伝承館（森舞台）」は平成8年に完成しましたので、開館から30周年を迎えることになります。

設計・施工監理は「隈研吾氏」、森舞台の鏡板の老松と若竹を描いていただいたのは「千住博氏」です。今やお二人とも世界的に著名な建築家・日本画家として、大活躍をしています。

平成8年6月に「森舞台」のオープン行事が行われました。この時に「隈氏」、「千住氏」から建築に関わった思いのメッセージが寄せられ、現在も、弊社ホームページに掲載しております。30年経過の歴史を振り返り、「森舞台」の設置意義について、改めて考えてみたいと思います。

「隈研吾氏」(隈研吾建築都市設計事務所)からのメッセージ(平成8年6月)

「能はそもそも大自然の中で演じられるものであった。能が能楽堂という形で室内に閉じ込められたのは近代の出来事である。

「森舞台」は登米町の美しい森の中に、能というドラマツルギーを再び開放しようとする試みである。野外に開放された「森舞台」は、能が演じられない日にも人々を受け入れ、舞台の周りを巡る人々の想像の中に「見えざる能」が再構築される。舞台を囲む「白洲」の空間は段状に立ち上げられ、その下部には「能の資料館」の空間が生成された。資料館は登米町の謡曲会の人々の稽古の場としても利用される。

「正面見所」は能を見るためだけにあるわけではなく、森を鑑賞し森と一体になるためのフレーム(枠組)もある。すべての空間は森に向かって開放され、そして登米町の人々に、能を愛するすべての人々に対して開放されている。この建築を通じて「開かれた文化施設」のひとつのプロトタイプ(原型、手本)を提示したいと思った。」

※ ドラマツルギー：演劇で用いられる専門用語で、「作劇法」や「上演法」

能舞台(森舞台)の建設①(人生水の如くより 著者:中澤弘氏)

私の祖父は、謡曲を趣味としており、とよま謡曲会の事務局(まとめ役)でもあった。憲法公布記念小謡も作曲している。(節付は平隆志謡曲会長)終戦直後、疎開していた牧野というおばあさんから、福岡周斎氏(喜多六平太氏の第一の高弟)を紹介され、登米謡曲会の指導に東京から来られるようになり、夏・冬の年二回来町し、指導を受けるようになった。先生の宿舎は、私の家で数年間お世話をしていた。

謡や仕舞の稽古は、養雲寺が中心で、その合間の稽古は、私の家で行うこともあったので、門前の小僧のようなもので、謡は子供の頃から親しみを感じていた。



写真1 隈研吾氏

写真提供:隈研吾建築都市設計事務所
© Designhouse

写真2 中澤弘氏

写真:「人生水の如く」より 裏面もご覧ください



「千住博氏」からのメッセージ（平成8年6月）

「私は、能舞台の壁画制作に、奇を衒(てら)うこと無く真正面から挑んだ。実際の大きな老松がそこに存在する様な雰囲気が醸し出せればと考えた。私なりのアニミズムとして能舞台を捕らえるが為、私が使った絵の具は全て天然の岩絵の具であった。太古の人が何か不思議なパワーが身につき、そして宇宙との交流があると信じて、その身を飾り身に着けた宝石の末裔として、私の天然の岩絵の具はここにその歴史を始めるのである。

天然緑青により、ほぼ全面に緑色によって占められる能舞台は、前例がないのではなかろうか。そして若竹は全て天然群青で描いた。この表現も前代未聞であろう。この青は若さに通じる青であり、非物质的な精神性の象徴でもある。松が虚実の実であるのに対し、竹は虚を表している。

能舞台の壁画を制作してみて伝統から離れようと思えば思うほど大いなる伝統の手のひらで遊んでいるといった感じの制作過程の体験があった。この事を通して、私は日本文化の奥行きの深いダイナミズムを一人でも多くの方々に感じていただければと願っている。」

※アニミズム：すべてのものに靈魂や生命力が宿るとする思想のこと

※ダイナミズム：そのものが持つ力強さ、迫力



写真3 千住博氏 撮影:山口和也氏

能舞台(森舞台)の建設②(人生水の如くより 著者:中澤弘氏)

町長になると直ぐ能舞台の建設に着手した。建築家は浅野史郎知事の友人、残間里江子女史の紹介により、将来日本を代表する建築家になる人ということで、隈研吾氏にお願いした。この能舞台の鏡板の松の絵は、これ又、日本を代表する若手芸術家の千住博氏である。

この建物は、伝統芸能伝承館で、名称は浅野知事にお願いし、「森舞台」と命名していただいた。

建物の場所は、寺池城址の中段を考えていたが、丁度その頃、牛房坂の高橋氏の屋敷が町に寄贈されたので、竹林の背景が素晴らしいこと等で、高橋邸跡に建設した。

登米町に能楽や伝統芸能が伝承されている意義について

登米町には「能楽」だけでなく、「登米秋まつり山車行列」や「岡谷地南部神楽」が今まで伝承されています。

特に「登米能」は「伝統芸能」という側面だけではなく、登米町内では、「能楽」を通して日常生活の中で、建物の新築や婚礼の際の祝いの席では「謡三番」で始まるなど、能楽の礼儀や作法の慣習が今も色濃く残っています。

また、「登米秋まつり山車行列」や「岡谷地南部神楽」は、地域のお年寄りから子供達まで連帯感を醸成することに繋がっています。



写真4 伝統芸能伝承館(森舞台)秋の外観

次号は、「登米懷古館編」で7月発行予定です。

イベント情報

高倉勝子美術館 4月から5月のイベント

「水沢 ぐぐり雛展」4月11日(土)～19日(日)

「生田目富紀夫 石板画展」5月1日(金)～6月7日(日) 他

編集後記

あっという間に30年経過したという感じがします。開館後、しばらくは6月に「新緑薪能」が演じられていたことを思い出しました。

登米町で生まれ育っても、「登米秋まつり」に参加している人達は、9月の「薪能」は見ることができませんので、6月の「新緑薪能」は「能楽」を知るよい機会でした。

鎌田